

## 楽曲解説

6/14(水) 第110回 東京オペラシティ定期シリーズ

6/18(日) 第893回 オーチャード定期演奏会

解説=野本由紀夫

6/14

6/18

リスト(1811-1886)

## 交響詩『レ・プレリュード』S.97/R.414

『レ・プレリュード』(新リスト作品番号LW-G3)は、「ピアノの魔術師」と呼ばれたフランツ・リストがピアニストを引退し、作曲家・指揮者に専念するようになって発表した3曲目の交響詩。リスト42歳の1854年2月23日、自身の指揮によりワイマールで初演。

この交響詩には、「私たちの人生は、『死』へのプレリュード(前奏曲)である」とはじまる標題が掲げられている。つまり標題音楽だ。じつは、交響詩という名称も「標題音楽」という用語も、フランツ・リストが生み出した。1855年のことである。

しかし、標題音楽のことを、物語に沿って作曲したり情景描写をしたりする音楽だと、誤解していないだろうか? 標題=内容、これも根本的にまったく誤りである。

この曲も、作曲者自身が正式名称として「ラマルティエヌの詩による交響詩『レ・プレリュード』」と記しているにもかかわらず、アルフォンス・ド・ラマルティエヌ(1790-1869)の詩とはまったく無関係だ。なぜなら、標題は音楽が完成したあとに探してきたからである。

物的証拠がある。見つけたのは、私である。1991年11月、ヨーロッパ中を駆けめぐる数年にわたる調査の末、ドイツで手稿譜を発見した。

じつは、リストは1844年から翌年にかけて、男声合唱曲『四大元素』を作曲していたのだが、その曲集に序曲を作曲していたといわれる。その序曲は失われた、とされていた。

私が発見した手稿譜は、その序曲だったのである。タイトルは、交響曲『四大元素』となっていた。曲の全体構成は、交響詩『レ・プレリュード』とまったく同じである(2011年10月2日、筆者の指揮で世界初演、NHK-FMでも世界初放送)。しかし、序曲だったころ、まだ標題(序文)は付いていなかった。序曲は、合唱曲のメロディを組み合わせて作曲しているのだから、標題など必要なかったわけだ。

重要なのは、もともとの合唱曲は、歌詞がジョゼフ・オートラン(1813-1877)の詩だったことだ(彼はやはりフランスの詩人で、ラマルティエヌの忠実な弟子だった)。メロディは歌詞から生まれる。その点でも、ラマルティエヌの詩は、作曲にまったく無関係だったことが音楽史上はじめて物的に証明された。

では、なぜリストは最終的にラマルティエヌのことを持ち出したのだろうか。それは、当時の

教養人たちなら、この偉大な詩人の作品をすぐに思い出せたからだろう。目的は、標題の文章を読むことで、聴衆が音楽の「フォルム」(音楽の経過や主題の発展プロセス)を聴きながら音を追える(ソルフェージュでいう「形式聴」<sup>けいしきちやう</sup>)ようにすることだった。

以下に、リストが付けた標題を全訳して載せておこう。間違えないでいただきたいのは、これはラマルティエヌの詩ではなく、リストが書いた標題(解説文)だということ。ラマルティエヌの原文は、全12章375行からなる長大な詩である。そのうち、リストが引用したのは、「トランペットが警報を発する」という、たった1行だけだ(原詩の第159行)。

私たちの人生は、まさにその厳粛な第一音が死によって奏でられる知られざる歌に対する、一連の前奏曲[複数形]そのものではないだろうか? 愛は、あらゆる生の、魅惑的な黎明を生み出す。だが、幸福の最初の快楽が、嵐によってすこしも邪魔されない運命などあるだろうか? その嵐は、快楽の麗しき幻想を致命的なひと吹きで消し去り、宿命の雷によって祭壇を焼き尽くす。そして、ひどく傷つけられて、そのような嵐の去ったあとに、いなかの生活のとても穏やかな静けさのなかで、その記憶を忘れようとする人がいようか? しかし、はじめのうちその自然の乳房に魅せられていた人も、この恵みの快適なぬくもりを長い間味わうことは、ほとんど甘受しない。そして彼は、隊列に召集された戦争がいかなるものであろうとも、「トランペットが警報を発する」と、危険な持ち場へと急いで行く。その戦闘のなかで自己意識を十分に取り戻すために、そして彼の持てる力を完全に回復するために。(野本由紀夫訳)

自分が言いたいことに絞って、シラーの詩をまったく組み替えて作曲したベートーヴェンの第九のように、リストも完成した自分の交響詩の流れに合うように、ラマルティエヌの詩の内容を大胆に改編して、あとから解説文として利用したのであった。

[作曲年代] 1844-1854 [初演] 1854年、ワイマールにて  
[楽器編成] フルート3(3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(小太鼓、大太鼓、シンバル)、ハーブ、弦楽5部

リスト(1811-1886)

## ピアノ協奏曲 第1番 変ホ長調 S.124/R.455

14曲あるリストの「ピアノとオーケストラのための」作品のうち、ピアノ協奏曲と題されているのは第1番(LW-H4)と第2番(LW-H6)だけである。第1番の主要主題のスケッチは、1832年から見られるものの、完成は1855年までかかった。

この曲の初演者は豪華だ。リスト自身がピアノ独奏を担当し、指揮をしたのは尊敬する親友ベルリオーズ(1803-1869)であった。初演は1855年2月17日、リストが宮廷楽長を務める

ワイマールでのことだが、その前日から21日までリストのプロデュースで「ベルリオーズ週間」(音楽祭を開催している中での、目玉コンサートであった)。

注目すべきことに、どの楽章にも共通モチーフが登場する上に(循環形式という)、全楽章がほぼ切れ目なしに演奏されるため、ピアノとオーケストラのための「交響詩」といえよう。

**第1楽章** 出だしから、ピアニストの腕の跳躍がダイナミックで、なかなか難しい。ピアノの華麗なテクニックとオーケストラとの掛け合いが聴きどころ。

**第2楽章** アダージョ風の緩徐楽章。ロ長調というロマン派的な幻想的な調で書かれている。弦楽器は弱音器を付けて演奏する(ベートーヴェンのピアノ協奏曲『皇帝』とも共通)。

**第3楽章** スケルツォに相当する楽章。トライアングルが活躍することから、宿敵で音楽評論家だったハンスリック(1825-1904)が「トライアングル協奏曲」と皮肉ったことは有名。もっとも、ハンスリックが絶賛したブラームスも、トライアングルを使っているのだが…(次項の交響曲第4番の解説を参照)。ちなみにブラームスは、この協奏曲の初演の2年前(1853年6月)にリストを訪問し、知己を得ている。

**第4楽章** 行進曲風の第4楽章。最後に第1楽章冒頭の主題が再現される。

[作曲年代] 1832-1855 [初演] 1855年、ワイマールにて  
[楽器編成] フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器(大太鼓、トライアングル、シンバル)、弦楽5部、独奏ピアノ

ブラームス(1833-1897)

## 交響曲第4番 ホ短調 op.98

交響曲第5番として計画された作品が「<sup>ドッベルコンチェルト</sup>二重協奏曲」になってしまったため、結果的にブラームスの最後の交響曲となった作品。第1・2楽章は1884年、第3・4楽章は1885年に作曲されたため、楽器編成が曲の前半と後半で異なり、後半で増加する。ティンパニも、ブラームスではめずらしく、第3・4楽章では1台多い3台使われる。老境の作品と勘違いされがちだが、50歳を過ぎたばかりの中期の作品である。

ドビュッシー(1860-1918)が活躍をはじめた時期の作品だということを考えると、いかにも時代遅れな響きに思われるかもしれないが、音楽分析してみると、驚くほど20世紀的なアイデアにあふれている(新版の全音楽譜出版社「ブラームス交響曲スコア」で詳述)。

**第1楽章** 20世紀の「音列技法」に通じる主題で作曲されている。じつは、冒頭の主題は、3度音程の下行(シ $\searrow$ ソ $\searrow$ ミ $\searrow$ ド $\searrow$ ラ $\searrow$ ファ $\searrow$ レ $\searrow$ シ)と3度音程の上行(ド $\nearrow$ ミ $\nearrow$ ソ $\nearrow$ シ $\nearrow$ レ $\nearrow$ ファ $\nearrow$ ラ $\nearrow$ ド $\nearrow$ ミ)でできており、本日の演奏会の前半でお聴きいただいた「革新派フランツ・リスト」と同時代的な発想なのだ。ブラームスは、伝統主義の仮面を着けた「遅れて

きた革新者」と呼ぶべきであろう。

**第2楽章** ソナタ形式による緩徐楽章。ホ短調というより、中世の教会旋法(フリギア旋法)によるメロディ。木管楽器と弦楽器の対比が美しい。

**第3楽章** ブラームス自身がスケルツォと呼んでいた楽章。明るい調なのに「自虐的」に響く。トライアングルはこの楽章でのみ、用いられる。同時期の「大学祝典序曲」にもトライアングルは使われているので、音楽の内容が共通するのかもしれない。先述のとおり、ブラームスを絶賛していた音楽評論家ハンスリックは、リストがトライアングルを使ったときには酷評したが、ブラームスのこの曲については、まったくスルーしている。なお、この楽章の和音進行があちこちで今日のJ-Popと同じ進行になっていることも、注目すべきだろう。

**第4楽章** ブラームスが「シャコンヌ」と呼んでいた楽章。シャコンヌは、バッハ(1685-1750)などのバロック時代の変奏曲の形式。冒頭に聴こえるのはバッハのカンタータ第150番にもとづく主題で、これを36回ヴァリエーションしていく。

冒頭から第3変奏まで、この主題はソプラノ声部(高音部)に出てくる。このメロディは第4変奏からは低音部に移るので、そこから「副主題部」となる。音楽が静まってテンポがゆっくりになって、フルート独奏となる部分は「緩徐部分」(第10~15変奏)。まるで冒頭と同じに聴こえる部分が、「展開部」のはじまりである。テンポが急速になった部分から「コーダ(終結部)」となる。古くて新しいブラームスの、ひとつの集大成の楽章といえよう。

[作曲年代] 1884-1885 [初演] 1885年、マイニンゲンにて

[楽器編成] フルード2(2番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器(トライアングル)、弦楽5部

のもと・ゆきお(指揮・音楽学)／桐朋学園大学助教授を経て、玉川大学芸術学部教授。研究にもとづく世界初演のオーケストラ指揮者。NHKテレビ「名曲探偵アマデウス」「ららら♪クラシック」、Eテレ学校番組「おんがくプラボー」番組委員ほか。全音楽譜出版社より、詳細な楽曲解説付きのブラームス交響曲全曲スコアを新たに出版した。